

「乳房」「子宮卵巣」 女性の病気が意味するもの



7月18日、上京のスケジュールの一つが
元女優の宮崎ますみさんとの面談でした。
私は1ヶ月に5冊ほど読書をしますが、久々に超感動したのが
宮崎さんの著書『ピュア・バランス』(2015.6上梓)

「病気は不幸な出来事ではない、自分が家族が変わる有り難い出来事」

そこには私が悟ったことが、ズバリ書かれてあったのです！

宮崎さん自身、右乳がんを経験されています。
有名人でもあることから、様々なところから講演のオファーを受けました。
その中で、
「積極的に乳がん検診を受けましょう！」
という趣旨よりも、宮崎さんが本当に伝えたかったことは

「どうして自分が乳がんになったのか？」

それを深く、深～く洞察してほしいということでした。

「この病気は今の私に、何を気づかせようとしているのか？」

病気になった自分を受け入れて、自分に向き合っていく姿勢を持つことから
真の治癒は始まるということでした。

乳がんを患った原因。宮崎さんは以下、分析されていました。
幼少期から親の目を気にして、自分らしく生きて来られなかった。
女優になってからも周囲の目を気にして、ガマンと抑圧がクセになっていた。
自分の正直な気持ちを言葉にして相手に伝えられない、表現できないという
パターンこそが、がんを作り上げてしまった。
宮崎さんは自分の幼少期にまで戻って、自分を客観視されたのです。
さらには、過去世にまで戻って・・・

今の自分は、これまで生きてきた自分が作り出している。
ならば、どうすれば自分は、この病気から解放されるのか？

そうした考え方が病気を治す上で最も大切なのですが、多くの人たちは
病院に行って、医者に診てもらって、薬をもらってきちんと飲めば
それで治るものだと思っている。それはそれで大切なことですが、
なかなか治らないとなると、すがる思いから一転、「あそこはヤブ医者だ！」と
怒りを向けます。自分の病気を「人任せ」にしています。

自分が病気になったことは、あくまでも自分の問題。
医者や手術や薬は「脇役」であって、病気を治す「主役」は自分自身。
自分が自分を知らずして、自分の病気が治るはずがありません。

「自分のことは自分が一番わかっている！」
そう豪語する人に限って、何もわかっていません。

宮崎さんは今、女優業をお休みしてヒプノセラピストとして活躍されています。ヒプノセラピーとは催眠療法のこと、潜在意識にある記憶の扉を開けるものです。今では多くの人たちに「気づき」を与えていらっしゃいます。

以下、宮崎さんと太田東西のやりとりです。

「私は10年前までは、治してやろう！と意気込んでいましたが、その考え自体が患者さんをダメにしてしまうことに気づきました。治してあげるのではなく、
どうして自分がこの病気になったのか？それを気づかせてあげる。
それが今の私の漢方相談のスタイルですが、宮崎さんはいかがですか？」

「私も同じスタンスです。治してあげるという考えは、クライアントとの間で依存と支配の関係をつくります。私の場合はヒプノを通じて、病気を治してあげるのではなく、自分の本質を引き出してあげるお手伝いをしています」

「著書には乳がんになったご自分を考察されていましたが、女性ホルモンに係る病気（乳がん、子宮がん、卵巣がん、子宮筋腫、子宮腺症、卵巣嚢腫、不妊症など）は、その女性のメンタルと大きく関係していると経験しています。宮崎さんはどう思われますか？」

「そのとおりですね、精神的ストレスが大半ですね」

「やはり、ガマン・抑圧・生真面目・頑張り過ぎといった性格でしょうか？」

「自分の中に安心感を持ってない人が圧倒的に多いですね。他人に頼れない、全部自分でやってしまうとする頑張り屋さんたちですね」



「その性格が悪いということではなく、では、どうして自分はそうした性格になったのか？ その観点が必要ですよ？」

「そう思います。私たちの思いグセや行動パターンの根っこは、幼少期の家庭環境にあります。私自身、家の中の空気は常に深い悲しみと不安感が漂っていました。8～9才までの家庭環境、家族との関わりが、その人のその後の人生に大きく影響を与えています」

「つまり、起こる現象にはタイムラグがあるということですね。今の病気はここ最近の出来事ばかりが原因ではなく、幼少期から積もり積もった無意識につながっているわけですね」

「著書ピュア・バランスの中で特に共感した部分が、
がん患者さんの多くは、患部に触ることも意識することも嫌がります。感じたくないから、目を向けたくないから、お医者様に悪いところは全部取っちゃってくださいと言ってしまうのです、という箇所でした。女性が女性のシンボルである

乳房や子宮卵巣を、何のためらいもなく切除してもらおうとする。
逆説的ですが、だから女性ホルモンに関係する病気になったのではないかと考えたりしていました」

「私のクライアントでこんな例があります。その女性は子宮がんで子宮卵巣を全摘されたのですが、ヒプノセラピーを受けていただいてわかったことは嫉妬の炎でした。女性の夫は長年浮気をしていました。女が女を捨てれば、この嫉妬の苦しみから解放されるという思いが、全摘という選択をさせていました」

「誤解を恐れずに言えば、怒り、攻撃、反撃、支配、結果至上、負けず嫌いなど、男性的な性格の女性にこうした病気が多いような気がするのですが？」

「昔の私もそうでした(笑)」

「その際、男である私が、もっと女性は女性らしく！と言えば、女性蔑視の押し付けとだと反論されたりします。男女平等の時代に、女性を縛る考えだとか。著書で宮崎さんは、女性は女性性を大切にすると同時に、積極的に男性を許していかなければならないとまで書かれてたことには、驚きました！」

「子宮や乳房は特に子どもを育む大切な器官です。次世代を担う子どもたちを宿す神聖なる母体として、どれだけの女性が自分の身体を気にかけているでしょうか。食習慣や生活習慣で、どれほど痛めつけられていることか。女性本来の気高さを取り戻すために、子宮がんや乳がんは増えているのかもしれませんが」

「最後に、女性が心身の健康を持続するには何が必要ですか？」

「ほんとうの自分を思い出す、女性性を取り戻すことです」



初対面にもかかわらず
実にノリの良い、
ますみ先生でした！(笑)